

平成27年2月27日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 山本 晃彦 学生番号 1D503

〈論文題名〉

日本語学習者の学習意欲の変化とその要因
ーインドネシアにおける渡日前日本語研修の事例よりー

審査委員

主査 外国語学部教授

石川 守



副査 外国語学部教授

小林 孝郎



副査 外国語学部教授

保坂 芳男



I. 論文の主旨

教育に携わる者は学習者の学習効果を高め、少しでも到達目標に近づけるべく、日々試行錯誤を重ねている。授業の分かりやすさ、習得に向けてのトレーニング法等、教授力の向上はもとより、どうすれば学習者の「やる気」を引き出すことができるかという問題にも日々創意工夫を重ねている。人が何かをなす場合、その効果、継続、成否等には「やる気」、いわゆる「動機づけ」が大きく関わってくる(上淵:2004)。人が何かを始める場合、そのほとんどが何らかの成果を得ることを目標にしているにもかかわらず、学習の過程で意欲が低下し、学習を断念したり、意欲を喪失したまま惰性で学習を継続する学習者の姿も散見される。教育の現場に身を置く者なら、誰でも1度は学習意欲を喪失した学習者に頭を悩ませた経験があるはずである。意欲を喪失した学習者がどうすれば再び意欲を獲得できるのか、そもそも学習意欲を低下させずに、高いレベルのまま維持するにはどうすればいいのか、教師ならだれもが抱く関心から、「動機」について、筆者が関わってきたインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の渡日前日本語研修における意欲低下の実態と回復に関し調査し、その結果から意欲回復のストラテジーを見出し、意欲再生ストラテジーの獲得に向けて教師がどのように誘導していくか等の可能性を実証しよりよいトレーニング法を確立していくことを目指している。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

目次

第1章 序論

- 1 研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 多様化する日本語教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
 - 2. 1 海外における日本語教育
 - 2. 2 日本国内における日本語教育
- 3 主な動機づけ研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
 - 3. 1 「道具的動機づけ」と「統合的動機づけ」
 - 3. 2 自己決定理論
 - 3. 3 L2 motivational self system
 - 3. 4 その他の理論
- 4 本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第2章 日本語教育における動機づけ研究の概観

1	動機づけ研究の分類	12
2	学習環境による動機づけ研究の分類	14
2. 1	文献調査	
2. 2	海外における研究	
2. 2. 1	ニュージーランド	
2. 2. 2	タイ	
2. 2. 3	ドイツ	
2. 2. 4	ネパール	
2. 2. 5	シンガポール	
2. 2. 6	ロシア	
2. 2. 7	韓国	
2. 2. 8	中国	
2. 2. 9	台湾	
2. 2. 10	モンゴル	
2. 2. 11	香港	
2. 2. 12	ウクライナ	
2. 2. 13	カタール	
2. 2. 14	インドネシア	
2. 2. 15	その他の国・地域	
2. 3	日本国内における研究	
2. 3. 1	大学における動機づけ研究	
2. 3. 2	日本語学校における動機づけ研究	
2. 3. 3	その他の機関における動機づけ研究	
3	日本語教育における動機づけ研究まとめ	53

第3章 研究方法

1	調査協力者の背景	56
1. 1	EPAとは何か	
1. 2	EPAに基づく看護師・介護福祉士受け入れの概要	
1. 3	予備的日本語研修の概要と特徴	
2	調査の概要	60
2. 1	調査協力者	
2. 2	質問紙の作成	
2. 2. 1	質問紙1 学習意欲の低下の時期と要因	3か月研修版
2. 2. 2	質問紙2 学習意欲の低下の時期と要因	6か月研修版
2. 2. 3	質問紙3 自律的学習動機尺度	

- 2. 3 調査時期
- 2. 4 調査協力者の属性

第4章 意欲の維持

- 分析1—どのような学習者が意欲を長期間維持することができるのか・・・66
 - 1 意欲維持群の傾向・・・66
 - 1. 1 研修期間の長さによる差異
 - 1. 2 属性による差異
 - 1. 2. 1 性別による差異
 - 1. 2. 2 既習歴による差異
 - 2 自律的動機づけと意欲維持との関連・・・70
 - 2. 1 調査方法
 - 2. 2 調査結果
 - 2. 2. 1 内的調整
 - 2. 2. 2 同一化的調整
 - 2. 2. 3 取り入れ的調整
 - 2. 2. 4 外的調整
 - 2. 2. 5 その他
 - 2. 2. 6 全項目の結果
 - 3 自律的学習動機下位尺度による分析・・・77
 - 3. 1 E P A候補者とインドネシア人大学生の相関
 - 3. 2 因子分析
 - 3. 3 下位尺度間の関連
 - 3. 3. 1 E P A候補者と大学生との差異
 - 3. 3. 2 E P A候補者意欲維持群と意欲揺れ群の差異
 - 4 意欲が長期間維持できた理由・・・84
 - 4. 1 意欲が維持できた理由—K 3 群
 - 4. 2 意欲が維持できた理由—K 6 群
 - 5 分析1のまとめ・・・87
 - 5. 1 意欲維持群の属性
 - 5. 2 意欲の維持と自律的動機づけ
 - 5. 3 インドネシア人学習者の自律的学習動機下位尺度
 - 5. 4 意欲を維持するための働きかけ

第5章 意欲の低下

- 分析2—学習意欲の低下の要因は何か・・・91

1	意欲低下要因の下位尺度の分析	92
1. 1	因子分析	
1. 2	意欲低下要因下位尺度間の関連	
1. 3	研修期間の差の検討	
1. 4	研修期間別の相関	
2	意欲低下要因各項目の分析	95
2. 1	研修期間の長さによる各項目の平均値の差	
2. 2	性別、年齢による差	
2. 2. 1	性別による差異	
2. 2. 2	年齢による差異	
2. 3	既習歴による差異	
2. 3. 1	「既習歴なし」群の傾向	
2. 3. 2	「既習歴 300 時間未満」群の傾向	
2. 3. 3	「既習歴 300 時間以上」群の傾向	
3	時期による意欲低下要因の差異	105
3. 1	意欲が揺れた時期と意欲低下要因下位尺度の関連	
3. 1. 1	意欲が揺れた時期と意欲低下要因下位尺度の関連－K 3 群	
3. 1. 2	意欲が揺れた時期と意欲低下要因下位尺度の関連－K 6 群	
3. 1. 3	K 3 群と K 6 群の比較	
3. 2	意欲が揺れた時期と各項目の関連	
3. 2. 1	意欲が揺れた時期と各項目の関連－K 3 群	
3. 2. 2	意欲が揺れた時期と各項目の関連－K 6 群	
4	分析 2 まとめ	112
4. 1	意欲低下要因下位尺度の検討	
4. 2	意欲低下要因項目の検討	
4. 3	意欲が揺れた時期と意欲低下要因の関係	

第 6 章 意欲の推移

分析 3－意欲の維持状態はどのように変わっていったか	115
1 意欲維持群の減少過程	115
2 意欲が揺れた時期と要因	118
2. 1 意欲が揺れた時期と要因－K 3 群の自由記述より	
2. 2 意欲が揺れた時期と要因－K 6 群の自由記述より	
2. 3 意欲維持群の推移プロセスとその要因	
3 分析 3 まとめ	123
3. 1 意欲の推移の傾向	

3. 2意欲の推移の要因

第7章 意欲の推移

分析4ー学習意欲はどのように再生されるか	125
1 意欲維持率の推移	125
2 研修終了時の意欲	128
3 意欲再生ストラテジーについて	130
3. 1 K3群の意欲再生ストラテジー	
3. 2 K6群の意欲再生ストラテジー	
4 分析4まとめ	137
4. 1 意欲維持率の類似性	
4. 2 意欲再生ストラテジーの差異	

第8章 結論 — 総合考察

1 本研究の要約	138
1. 1 学習意欲の維持： どのような学習者が意欲を長期間維持することができるのか	
1. 2 学習意欲の低下：学習意欲の低下の要因は何か	
1. 3 学習意欲の推移：学習意欲はどのように移り変わっていくか	
1. 4 学習意欲の再生：学習意欲はどのように再生されるのか	
2 教育的観点による考察および提言	143
2. 1 意欲維持群の推移の類似性	
2. 2 意欲の配分	
2. 3 インドネシア的学習観	
2. 4 学習意欲の低下とは？	
2. 5 意欲維持および再生ストラテジーの発達	
3 今後の課題と展望	150
3. 1 意欲の自律的なコントロールに向けて	
3. 2 おわりに	

Ⅲ. 本論文の概要

第1章 序論

近年、日本語教育の領域でも動機づけ研究が注目されている。これまでの研究はいかに動機づけを高めるか、いかに意欲の低下を抑えるかといった視点で研究が行われてきた。しかし、意欲の維持のみならず、意欲の揺れとどのように向き合うか、どのように自律的にコントロールしていくかが達成目標の成功の可否を担う重要な鍵とも言えると述べ、本研究の趣旨について、以下の4点を明らかにすることにより、意欲の状態を自律的にコントロールすることが可能か否かを探ることを目的としている。

- 1) 学習意欲の維持：どのような学習者が意欲を長期間維持することができるのか。
- 2) 学習意欲の低下：学習意欲の低下の要因は何か。
- 3) 学習意欲の推移：学習意欲はどのように移り変わっていくのか
- 4) 学習意欲の再生：学習意欲はどのように再生されるのか。

第2章 日本語教育における動機づけ研究の概観

ここでは学習環境の違いに焦点をあて、国内外でどのような研究が行われているかについて概観している。国際交流基金の2012年の調査によると、136の国・地域において日本語学習者は存在するが、動機づけに関する報告がなされている国はわずか十数か国であり、大学生の動機づけを扱ったものが多い。日本国内でも大学生対象が多いが、調査内容は動機づけとその他の要因の関連性を扱ったものや動機づけを高めるための実践報告も徐々に見られるようになってきている。しかし、動機づけの変化を扱った研究はごく少数であったとし、本論文の意義について述べている。

第3章 調査方法

本研究は主に質問紙による調査によって分析を進めていったこと、調査協力者は経済連携協定（以下、EPA）に基づくインドネシア人看護師・介護福祉士候補者であり、渡日前日本語研修の場において調査を行ったと述べている。調査は2011年来日の第4期生と2013年来日の第6期生を対象に行い、以下、研修期間3か月の第4期生をK3群、研修期間6か月の第6期生をK6群と称するとしている。質問紙には①学習意欲の低下した時期と要因、②自律的学習動機尺度を用いたと述べている。協力者数は①K3群：95名、K6群154名、②K6群144名、日本語を主専攻とするインドネシア人大学生44名であったと述べている。

第4章 意欲の維持

まず、研修期間の長さや属性に焦点をあて、意欲維持率に差異がみられるかについて検証し、その結果、研修期間が長くなるほど意欲を維持し続けるのは難しいこと、意欲の維持状態に性差は見られないこと、日本語学習経験のある学習者のほうが意欲を維持しやすい傾向が見られることを明らかにしている。

続いて、自律的学習動機の下位尺度について検討を行い、自己決定的に日本語を学ぶインドネシア人学習者に特有と思われる因子、「インドネシア的学習観」因子を抽出し、それが他の因子に影響を与えていることが分かったとしている。

研修期間中1度も意欲が揺れなかった学習者群（以下、意欲維持群）がどうして意欲を維持できたのかを分析した結果、「必要性」、「能力の向上」、「他者の存在」、「夢・目標」などのカテゴリーが抽出されたと述べている。

第5章 意欲の低下

まず、学習意欲低下要因の下位尺度について検討を行い、「教師」「課題」「自信喪失」「緊張感喪失」の4つの因子を抽出している。中でも「緊張感喪失」が最も大きな要因であると述べている。それに対して、「教師」因子が最も低く、研修期間中の教師と学習者の関係が良好であったことが証明されたとしている。ただ、「教師」と「自信喪失」との間に中程度の相関が見られたことから、「教師」と「自信喪失」の間に何らかの関わりがある可能性があるのではないかと述べている。

次に、学習意欲低下要因の項目ごとに属性による差異について検証を行い、その結果、K6群においては「緊張感の喪失」要因が突出しており、研修期間が長くなると「緊張感の喪失」が大きく関わってくることが示唆された。自信喪失に関する項目では研修参加以前の日本語既習歴なし群と既習歴300時間以上群で高い平均値を示していた。さらに既習歴300時間以上群では自己成長が確認しづらいことによって意欲低下を引き起こす可能性が認められた。既習歴300時間未満群では以前に所属した学習機関の影響が研修当初に見られることも分かったと述べている。

さらに研修期間を前期、中期、後期に分割し、意欲低下がどの時期に起こったかによって意欲低下要因の認識に差異が見られるかを検討している。前期揺れ群にはK3群では既習歴のない学習者が多く含まれており、未適応による「授業の速さ」から意欲が低下する様子がうかがえたと述べている。中期揺れ群ではK3群、K6群ともに「自信喪失」による意欲低下を認識し、後期揺れ群では「緊張感の喪失」「ホームシック」「自己成長が認識しづらい」ことが大きな要因となっていたとしている。

第6章 意欲の推移

意欲維持群の減少過程を観察した結果、K3群、K6群ともに類似の傾向が見出されたと述べている。また、K6群のほうが減少率が緩やかであったことから、ゴール地点を見据えたペース配分を行っている可能性が示唆されたとしている。

どの時期にどのような原因で意欲が低下したかを分析した結果、研修前期に意欲が低下した原因は日本語学習にすぐに適応できなかったことが大きな原因であること、研修に適応できた協力者でも学習項目の難易度が上昇すると意欲低下を認識し始めること、何らかの「変化」によって一時的に意欲は低下するがすぐに再生すること等がわかったと述べている。

第7章 意欲の再生

前章では意欲が一度も揺れなかった学習者の減少について検討を行っているが、ここでは意欲が揺れたものの、意欲を再生させた学習者の存在についても併せて検討を行っている。その結果、研修期間が長くなると一度再生させた意欲も再度揺れることがあり、再生させた意欲を維持し続けることの難しさも見られた。

次に意欲再生ストラテジーについて自由記述による回答を求めた結果、適度な「リフレッシュ」、「重要な他者の存在」に対する働きかけ、「夢、目標、目的」の想起が大きな要素であり、K3群よりもK6群のほうがストラテジーが多様であり、より具体的な内省を行っていることがわかったと述べている。

第8章 結論

今回の調査で、既習歴の長い協力者らは、かなり自律的に意欲をコントロールすることに成功していたように思われるとしている。そこで、今回の調査結果をもとに、学習者が意欲を自律的にコントロールするためのストラテジーを獲得するための留意点について提言することによって本稿のまとめとしている。

1) 意欲推移モデルの作成

第6章ではK3群とK6群の意欲維持群の減少率を表したグラフにおいて、その推移過程が類似していることを明らかに述べている。これらの2群は期間の長さこそ違うものの、研修環境はほぼ同質で、研修参加者に重複はなく、講師も大部分が入れ替わっているにもかかわらず、類似傾向が現れたということは、学習者の目的や学習環境の質が類似していた場合、意欲維持群の推移傾向は類似性を示す可能性が高いということを示していると分析している。このことから、意欲維持率の推移モデルを導き出すことができ、学習者群全体の意欲の推移傾向を知ることができる。意欲の視点からコースデザイン、カリキュラム作成等に生かすことも可能であろうと述べている。

2) 意欲低下要因の把握

山本(2007)では意欲の低下要因を知り、教師がそれを意識したクラス運営を行うことで、「緊張感の喪失」および「学習内容による不満」からの意欲低下が抑えられる可能性が

高いと述べている。しかし、具体的な方策は特にとられておらず、何が原因で意欲低下が抑えられたのかも究明されていないとし、教師が意欲低下要因を知ること自体が重要であり、教師が試行錯誤を行っていくことがよりよいクラス運営への第一歩であるとしている。

3) 学習環境特有の自律的学習動機因子の発見

自律的学習動機についてはこれまで日本語教育においてほとんど取り上げられることがなかった。学習に対して自律的であることが動機づけに対して大きな影響を持つことは内発的動機づけ理論上で明らかにされているが、何が自律的であるのかは風土によって異なると述べている。その国における「自律的学習動機づけ」因子を把握することは、学習者の自律度を高める実践を行うために必要不可欠なものであろうとしている。多因子への影響が大きい「環境独特の学習観」を発見することによって、正の影響を強化し、負の影響を抑えるための参考とすることができると述べている。

4) 意欲再生ストラテジーの獲得

本研究の調査の協力者の傾向を見ると、自分なりのリフレッシュ法を持ち、他者の存在と夢・目標の認知が非常に有効であったことがわかったとしている。自律学習の促進には言語学習ストラテジーを用いることが有効であると言われるが、この研修における自律学習支援では学習方法の共有等で「直接ストラテジー」の育成と、ポートフォリオ等の振り返りにより「間接ストラテジー」の育成がなされたと述べている。この「間接ストラテジー」の下位概念である「メタ認知ストラテジー」の発達が意欲再生ストラテジーの獲得につながったのであろうと推測している。たとえわずかな時間でも、振り返りの促しや学習方法の共有を行うことで、自律性の発達が促進される可能性があることを提言している。

本論文では意欲の維持・低下・推移・再生の4つの視点から、インドネシアでの事例を取り上げ、意欲の自律的なコントロールの可能性について検討を行っている。データは2回分のものであるため、あくまでも可能性の提示にすぎないが、これまで一時点にのみ注目した動機づけ研究が多かった中で、長期間にわたる意欲の推移のプロセスを総括できたことはひとつの成果であったと述べている。

今後は意欲再生ストラテジーの獲得に向けて教師がどのように誘導していくか等、これまで提言した可能性を実証していくことを課題としたいと述べ、さらに、意欲を自律的にコントロールするストラテジーの育成に向けて実践を行い、よりよいトレーニング法を確立していきたいと述べている。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2010年4月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了必要単位10単位はすでに取得済みであり、外国語検定試験（インドネシア語）にも合格している。

論文提出時の業績は、中間発表および『拓殖大学言語教育研究』、各種学会発表など計29本となる。完成論文発表会は、2014年10月4日に実施され、論文は2014年11月7日に提出受理されている。審査委員による論文審査は、2014年12月16日 拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果は全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2015年1月9日に実施し、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

日本語教育の領域で動機づけ研究が注目されてきているが、これまでの研究はいかに動機づけを高めるか、いかに意欲の低下を抑えるかといった視点で研究が行われてきた。しかし、意欲の維持のみならず、意欲を喪失した学習者がどうすれば再び意欲を獲得できるのか、そもそも学習意欲を低下させずに、高いレベルのまま維持するにはどうすればいいのか、教師ならだれもが抱く関心から、「動機」について、筆者が関わってきたインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の渡日前日本語研修生に対して意欲低下の実態と回復に関し調査し、その結果から意欲回復のストラテジーを見出し、意欲再生ストラテジーの獲得に向けて教師がどのように誘導していくか等の可能性を実証し、よりよいトレーニング法を確立していくことを目指している点は適切かつ妥当である。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

日本語教育における動機づけの先行研究をほぼ全て網羅しており、それらに対して緻密な分析を行い、国別に丁寧に分析しているなど、驚くべきものがあり、メタ研究としても大いに意義があるものと思われる。また、筆者が携わってきた研修生に対して調査を行い、信頼性の高い調査となっている。ただ、審査委員からそれ以降の論旨の展開を考えれば、インドネシアにおける動機づけ研究、教育学研究の先行研究にも言及して欲しかったという希望が述べられている。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

日本語教育における動機研究に関する先行研究をほぼすべて網羅し、かつ、自身が2年にわたり、実際に指導したインドネシア人研修生に対して調査紙による調査を行い、統計学的手法を用い適切な分析を行っている点は妥当である。

なお、審査委員より今後の課題として以下の二点があげられた。

1. 動機づけ因子の中で「インドネシア人特有因子」が挙げられているがその実態に迫って欲しい。SLA研究分野における動機づけ研究の理論（Deciらによる自己決定理論）では説明がつかない「インドネシア人特有の理論」の背景になるものを明らかにして欲しい。
2. SLA研究における統計分析の表示の仕方、解釈の仕方に若干、疑問を感じるところがあった。博士論文として標準的な形式に統一した方が良いと思われる。

4. 論旨の妥当性

日本語教育研究の中で「動機づけ研究」は未開拓の分野であり、特に意欲の変化過程を綿密に分析した点でも重要な研究であると言える。研究対象者が、本人が実際に指導した学生でありデータの信頼性も高いと考えられる。研究の目的、デザインは、上記の観点から十分博士論文のそれに相応しいものである。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

本論文は、論文としての構造がしっかりしており論旨の流れが一貫している。また、言語表現も的確であり、博士論文としてふさわしいものである。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

本論文は、日本語教育における「動機づけの問題」に関し、ほぼ全ての先行研究を網羅し分析するなど、驚くべきものがあり、メタ研究としても意義がある。また、従来の動機づけの研究がいかに動機づけを高めるか、いかに意欲の低下を抑えるかといったところに焦点を当ててきたが、意欲の維持のみならず、意欲の揺れとどのように向き合ったか、ど

のように自律的にコントロールし、低下した意欲をどのように自律的に回復していったかということに新たに焦点を当て調査していったことは独創的である。また、その分析の中からインドネシア人学習者に特有と思われる因子、「インドネシア的学習観」因子を抽出したことは、今後の動機づけ研究の文化的背景を考える上で貴重な一石を投じたと言える。また、意欲低下の実態と回復に関し調査し、その結果から意欲回復のストラテジーを見出し、意欲再生ストラテジーの獲得に向けて教師がどのように誘導していくか等の可能性を実証し、よりよいトレーニング法を確立しようとするきわめて実践的な意味を持つ論文である。本研究には若干の課題が残されているが、全体として博士論文として十分それに値するものであり、インドネシアにおける日本語学習者対象の動機づけ研究の嚆矢になることは間違いないと言えよう。

筆者は、1991年より日本語教師として教壇に立ち、2003年本学大学院言語教育研究科に入学、修了後は拓殖大学日本語学校非常勤講師に就任、2006年より国際交流基金日本語上級専門家としてインドネシアに赴任した。2011年より博士後期課程に入学するも、再び国際交流基金からの強い要請により、日本語教育上級専門家、EPAインドネシアチーム副主任としてインドネシアに渡り、計画に主導的な役割を果たしている。そして、2013年帰国、この間、自ら担当する授業を通し調査研究を行い完成したのが本論文であり、極めて意義のあるものであることは既に述べた。また、筆者は、昨年4月より東京福祉大学留学生別科非常勤講師に就任し、現在に至っている。

学位申請者は、このように実践的な教育も行えるし、かつ研究も行えるという貴重な人材であり、将来、更なる活躍が大いに期待されるものである。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。